

平成30年度教育事業 発達段階に応じた体験活動
「幼小いっしょに！のとまり会」報告

1 趣 旨

- ・年長児と小学1・2年生が親元を離れ、自分の力で生活する場を提供する。これにより、一人ひとりが自分のできることを積み上げて体験の幅を広げるとともに、子供の自己肯定感を高める。また、年長児と小学1・2年生が共に活動する機会を設定することにより、関わる力を育てるとともに、どちらにとっても成長への一歩を踏み出す機会とする。
- ・保護者にとっては、子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりすることにより、子育てについて考える機会とする。また、保護者同士のつながりを構築する場とする。

2 ねらい

- ・異年齢集団による生活体験活動をととして、低年齢期の子供たちが体験活動の楽しさを感じるとともに、集団行動や人との関わり方のルール等に気付く。
- ・保護者が活動を通して学び、自らの子育てについて振り返る。また、保護者同士が関わりをもち、子育てに対して思いを深める。

3 日 程

- (1) 期 日 第1回 平成30年9月 2日(日) 日帰り
 第2回 平成30年9月 8日(土)～9日(日) 1泊2日
 第3回 平成31年1月12日(土)～13日(日) 1泊2日
- (2) 参加者 第1回 84名(子供37名、保護者他47名) ※募集 子供40名とその保護者
 第2回 67名(子供38名、保護者他29名) ※募集 子供40名とその保護者
 第3回 34名(子供) ※募集 子供40名
 ※参加者は3回とも同じ子供

(3) 研修内容及び講師

(○…子供プログラム、◎…親子プログラム、□…親プログラム)

第1回(日帰り) 能登青少年交流の家	第2回(テント1泊2日) 能登青少年交流の家/鹿島少年自然の家		第3回(1泊2日) 鹿島少年自然の家	
	1日目	2日目	1日目	2日目
【午前】 ○フードハントゲーム ○昼食(食堂の使い方・マナー) □トークセッション 講師:沼田直子氏 (南加賀保健福祉センター所長) □昼食		【午前】 ○テント撤収 ○朝のミッション ○朝食 ~鹿島へ移動~ ○ごりんぴっく ○昼食		【午前】 ○ピザ作り 
【午後】 ◎ホットケーキ作り ○振り返り 	【午後】 ○砂像づくり ○テント設営 ○夕食、入浴 ○読み聞かせ ○テント泊	【午後】 ○アップルパイ作り ~能登へ移動~ □トークセッション 講師:鈴木みゆき (国立青少年教育振興機構理事) ○振り返り	【午後】 ○そり遊び、自由遊び ○おとまり準備 ○夕食、入浴 ○読み聞かせ	【午後】 ○振り返り 



<トークセッション>



<フードハントゲーム>



<テント設営>



<ごりんぴっく>



<鹿島での夕食>

4 成果と課題

(1) 子供の変容の見取りの検証

①ねらいを明確にした評価

本事業を通して高めたい力を「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「社会とのかかわり」の3つのかかわる力とし、意図的・計画的に活動プログラムを仕組んだ。また、活動プログラムを実施する前に、子供たちの具体的な姿を想定しておくことで、スタッフやボランティアスタッフがねらいを共有して、効果的な指導を行うことができた。(右表) さらに子供たちにも活動に入る前に、活動の説明だけでなく、ねらいを伝えることで子供たちは意識して活動に取り組むことができた。

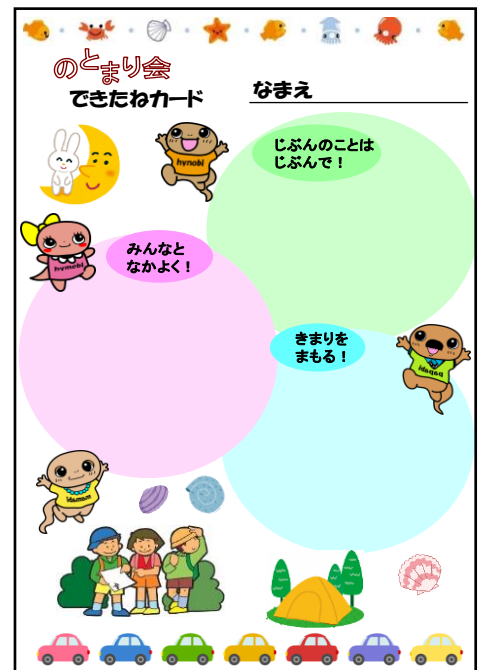
プログラムの中での具体的な子供の姿

場面	自分の力でやりとげる (自立心)	仲間と協力する (協同性)	きまりを守る (道徳性・規範意識)
始まりの会、 終わりの会			静かに話をきくことができる
アイスプレ イク			きまりを守って楽しく遊ぶ ことができる
フードハン トゲーム		仲間といっしょに行動する ことができる	
ホットケー キづくり	自分で料理することができる。 (かき混ぜる、焼く等)		
砂像造り	自分がイメージするものを作 ることができる	共同製作において、助け合 ったり、教え合ったりする ことができる	
テント設営 片付け	自分の役割を果たし、テ ントをつくることができる	仲間と協力して準備や片付 けをすることができる	
読み聞かせ	集中して絵本を読む(聞く)		

②できたねカードの見取り

昨年に引き続き、子供たちの成長の証を見える化し、活動への意欲を高めるための「できたねカード」を取り入れた。3つのかかわる力を子供たちに意識してもらうために、シールを貼る欄を3つに分けて作成した。活動プログラムを実施する前にスタッフがねらいを伝え、活動の終わりに班付きボランティアからシールをもらい、その都度カードに貼っていく活動を繰り返すことで、子供たちは成長を実感しながら意欲的に活動に取り組むようになった。

なかなか仲間と上手くかかわることができないK児(年長児)は、気に入らないことがあると目を吊り上げ、チームから離れ、一人でかくれんぼをしたり、走り回ったりすることがあった。しかし、「できたねカード」のシールが集まるにつれて、表情も明るくなり、チームの仲間と行動できるようになってきた。このことは、シールをもらったことで活動意欲に繋がったことだけでなく、ボランティアスタッフから「頑張ったね」と声をかけてもらい、自分を受け入れ、認めてくれたことに対する自己有用感の高まりに繋がったのではないかと思われる。



<シールを貼るボランティアスタッフ>



<シールを眺める参加者>

③子供の絵日記の見取り

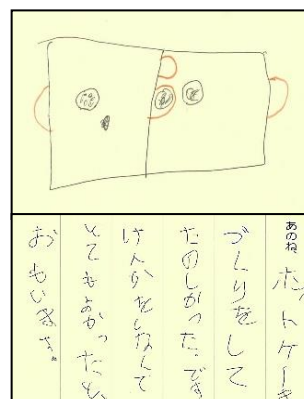
年長児や小学1、2年生児が活動の振り返りを自分の文章で書くことは、難しい面がある。そこで活動を通して一番楽しかったことを、絵日記で表現することにした。小学校1、2年生児には絵の説明を簡単な文章に書く欄を設けた。

事例1 N児(小学2年生)の成長

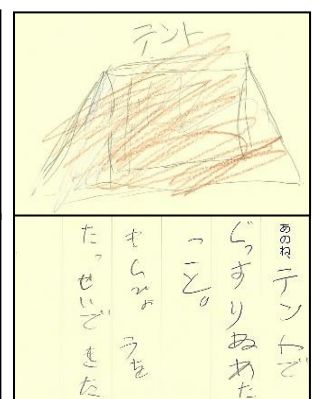
第1回のN児の絵日記では、「けんかをしなくてよかった」と記されていることから、他の人とのかかわりに着目している。N児は小学2年生の上級生としての立場、昨年も経験しているという自信をもって、自分たちのチームの仲間と仲良く過ごしたいという気持ちが推察される。実際に、積極的にチームの保育園児と手をつないで誘導したり、分からないことを教えてあげたりする姿が見られた。

第2回の絵日記では、「目標を達成できた」と記されていた。昨年は一人で泊まることに不安を感じ、「帰りたい」と言って泣き、スタッフが寄り添って寝たと

<N児 第1回の絵日記>



<N児 第2回の絵日記>



いう出来事があった。今年、N児の口から「帰りたい」という言葉はなかった。テント泊の時間になっても、泣き出すこともなく友達と話をしながら一夜を過ごすことができた。「テントで友達と寝る」ことを目標に決め、強い気持ちでのとまり会に参加したこと、そして、目標が達成できたことの充実感がこの日記から伺える。

のとまり会を通して、N児は自分の力でやり遂げる力（自立心）、仲間と協力する力（協調性）が高まったと考える。

事例2 M児（保育園児）のS児（小学2年生）の関係性

M児の第1回の絵日記には、フードハントゲームの様子が描かれていた。M児のチームは最後の問題であるアーチェリー場の場所が分からなくて諦めかけていたが、何とか探し出して全部の問題をクリアできた。そのM児の絵日記には自分以外に、リーダー格のS児が描かれている。S児は誰に対しても優しく接することができ、また、みんなにいろいろなことを教えてくれる頼もしい存在である。M児はそんなS児の存在を一目置き、憧れの存在として絵日記に記したものと考えられる。

一方、S児の第1回の絵日記にも、フードハントゲームの様子が描かれていた。さらに絵日記には、チーム全員とボランティアスタッフ2名の姿が描かれている。また、作文には、「一番の思い出はフードハントゲームでみんなと仲良くできたことです」と記されていた。S児はチームの仲間と楽しく活動したいと願っている。チームの中でトラブルがあった時も絶えず笑顔で声をかけ、間違っていることは間違いであると教えるなど、きまりを守ることの大切さを仲間へ伝えることができた。

M児はS児に支えられながら、安心してチームの中で活動できているのだと推察される。

<M児 第1回の絵日記>



<S児 第1回の絵日記>



④ボランティアスタッフへの聞き取り

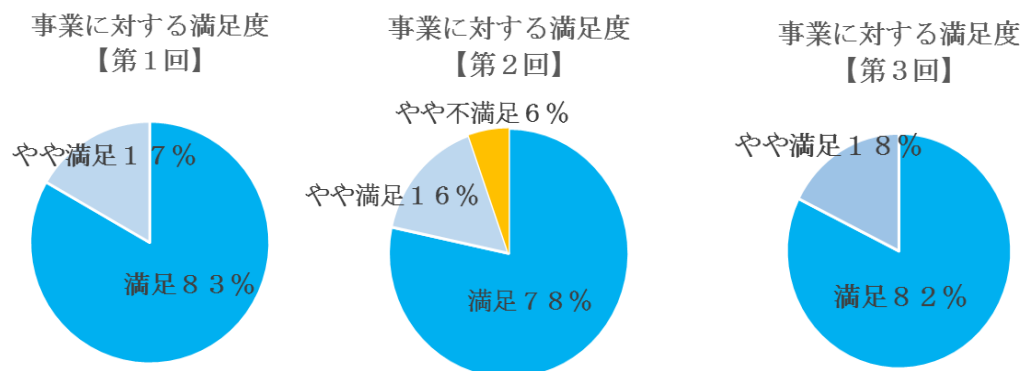
1 グループ子供6～7人に2名の班付きボランティアスタッフを配置した。3回連続で参加したボランティアもいたが、子供との関わりが深まるとともに、子供の変容を見取るためには有効であった。

<ボランティアスタッフの自由記述より>

- ・ホットケーキ作りで、子供たちだけで分担を決めて、小学2年生の子供が中心に頑張っていた。
- ・チームがバラバラになっている時に、男の子が「みんなであとまわって行こうよ」と叫ぶと、みんながまとまっていた。
- ・2日間で話を聞く姿勢がととてもよくなった。協力して何事にもチャレンジすることが増えてきた。
- ・第1回の際にあまりしゃべらなかつた子供が、第2回にはたくさんしゃべっていた。
- ・2年生の女子が、自分のやりたい気持ちを抑えて「私は最後でいいよ」と言ってくれたことが嬉しかった。
- ・できたねシールでは、子供たちから「〇〇できたから、〇〇にシールはって」と言うようになった。

(2) アンケート結果より

①参加者の評価（アンケートより）



第1回38名、第2回37名、第3回34名の参加者(子供)を対象に事業に対する満足度（楽しかったか）を調査した。第2回は初めて親から離れて宿泊する不安、友達との関わりの中での不満が少し見られ、満足度が低い子供が若干名いた。しかし、第3回の宿泊では、子供たちの我慢する心や友達と仲良くする意識の高まりが見られ、第2回よりも満足だと答える子供が多くなったと考える。

②保護者の評価（アンケートより）

第1回事業終了時と、第2回事業終了後約1か月後に保護者へ家庭での様子についてのアンケートを実施した。第1回と第2回両方に参加し、回答があった保護者を分析対象として、1要因2水準の分散分析を行った。

項目は、高めたい3つの力「自分とのかかわり」「他者とのかかわり」「社会とのかかわり」から、それぞれ2項目、計6項目とした。

表1は、各調査時期による平均、標準偏差、分散分析の結果を示したものである。分析の結果、事業前後において、5%水準で有意差が見られた。また、他者とのかかわりでは、1%水準で、社会とのかかわりでは5%水準で有意であった。

また、事後アンケートでは、子供の変化について自由記述欄を設けた。家庭や学校生活における変化があった。未就学児は、主に自分でできることが増え、年齢が進むにつれ、集団で生活する面での成長が見られた。

以上のことから、事業での「高めたい3つの力」が事業1か月後において高まっていることが分かった。

	観点項目
自分とのかかわり	自分のことは自分で言い、自分でできないことは助けを借りて自分で行うことができるか。 いろいろな活動や遊びにおいて、自分の力で最後までやりとげ、満足感や達成感をもつことができるか。
他者とのかかわり	相手にわかるように伝えたり、相手の気持ちを察して自分の思いの出し方を考えたり、我慢したり、気持ちを切り替えたりしながら、行動することができるか。 みんなで共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、実現に向けて力を発揮しやり遂げることができるか。
社会とのかかわり	相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いこととの区別などを考えて行動することができるか。 みんなと心地よく過ごしたり、より遊びを楽しくするためのきまりがあることが分かり、守ろうとすることができるか。

表1 キャンプ前後の高めたい力の比較

	事業前		事業後		t
	M	SD	M	SD	
①自分とのかかわり	8.16	1.25	8.28	1.43	0.19
②他者とのかかわり	6.76	1.82	7.76	1.50	8.11 **
③社会とのかかわり	7.64	1.49	8.24	1.42	4.50 *
合計	22.56	4.13	24.28	3.73	5.20 *

*p<.05 **p<.01

<1か月後の子供の変容についての自由記述より>

- ・「お風呂に1人で入れる!」「1人で寝れる!」と得意げに言い、家で自分のことは自分でするようになった。親がついていけないほどの成長にとっても頼もしく嬉しかった。
- ・保育園で、お茶をこぼして泣いていたが、自分で気持ちを切り替えて泣き止むことができた。
- ・親にべったりだったのが、親から離れ、他のお友達との関わりをもつことで、人に合わせたり、我慢したりするようになった。
- ・朝起きてすぐに何か勉強するようになった。
- ・以前にも増して「きまり」を大切にしてくれるようになった。
- ・自分より年下の子に対して、より積極的にかかわるようになってきた。

<沼田先生トークセッションに参加した保護者の自由記述より>

- ・子供の接し方で「ねえねえ、見て」と言われたら「なあに」と歩み寄ることが大事ということが印象的だった。時間が無い、忙しいことを理由に「後にして」と言っている自分を反省した。温かい声かけや行動を心掛けることが子供の自己肯定感を高める大切なことだと思った。
- ・自分に余裕がなくなると、つい強い口調で怒ってしまい、後悔して謝る自分が嫌いだった。でも、今日の話聞いて、自分を好きになることが大切だと感じた。自分を好きになれるように笑顔で育児を楽しみたい。仕事も笑顔で。

<鈴木理事長トークセッションに参加した保護者の自由記述より>

- ・早寝早起き朝ごはんに代表される生活習慣が整っていることが学力向上や初潮開始年齢等、様々なことに繋がっていることが分かった。真ん中の息子の自己肯定感が低いように感じられ、とても心配している。小言は8時までを実行したい。のとまり会を通して自信がつくことを願っている。
- ・初潮の低年齢化について最近耳にしていたが、パソコン、スマホ、睡眠不足の影響を知り、娘だけでなくこれから初潮を迎える女の子たちの親御さんも理解すべきことだと思う。
- ・脳の土台の話聞いて、今の時期に生活習慣が一番大事だと感じた。早期教育で習い事に力を入れるのではなく、体験や遊びを大切にしていきたいと思った。

(3) 成果

- ・子供たちに身に付けさせたい力を明確にし、子供・スタッフ・ボランティアスタッフが共有したことで、活動プログラムが充実し、成長の変容の跡が多く見られた。
- ・かかわる力の3つの能力を意識して活動するために、できたねカードの利用は効果的だった。
- ・年長児、小学生、男女が混合する6~7名でグループ構成したことにより、世話をする小学生の言うことを聞きルールを守って活動する年長児の姿が見られた。
- ・トークセッションプログラムを2回設定することにより、保護者が日ごろの子育てについての悩みや考えを相談したり、共有したりすることができた。

(4) 課題

- ・第2回（1泊2日）は時間の余裕が少ないプログラムであった。子供たちのかかわりをより深めるためにプログラムの間に意図的に自由時間を設定するなどの工夫が必要である。
- ・今後は、経年参加する子供の見取りを意図的に言い、成長の様子を評価することで事業の有効性を検証していくことができると考える。